

ブラウン
2本のアルトリコーダーのための
第1組曲

CDの演奏者

長谷川圭子 (リコーダー)

石田誠司 (リコーダー)

J. D. Braun
Suite No. 1
for 2 Alto Recorders

Players on CD

Recorder: Keiko Hasegawa

Recorder: Seiji Ishida

◆解説◆

前奏曲(プレリュード=Prélude)とそれに続く5つの曲から成っています。

—Prélude— 難易度 B2 —

なだらかな動きで歌っていきます。音階の練習にもなりますので、通常はこの曲から練習を始めるとよいでしょう。

第一リコーダー(以下Rec. Iと略記)2小節目などにある+の符号は「t.」から来ていて「トリル」です。トリルとは、「ひとつ上の音(つまり「シのトリル」の場合ならドの音)」とすばやく何度か交替して演奏する意味ですが、最初は省いて練習し、慣れたら少しずつこころみるとよいでしょう。ここでは「シ」にトリルがついていますから、「シー」のかわりにすばやく「ドシドシー」ぐらいで演奏します。この間、もちろんタンギングはおこなわずに息を入れ続けます。バロック時代の曲では、このようにトリルを「上の音」から開始するのが原則です。

Rec. Iの3小節目などにある「ミのトリル」は「ファミファミー」ぐらいで演奏しますが、ミの音に「023」という「替え指」を使ってください。(「指番号」については巻末の運指表をご参照ください。)

Rec. Iの6小節目2拍目の小さいラの音符は「前打音」です。ここではふつうの八分音符が書かれているのと同じ意味だと考えてよいでしょう。したがって、これに続く「ソ」の音も、表記上は四分音符ですが、実質は八分音符になると考えてください。

14小節目の付点四分音符のトリルは、「ソファソファソファー」(Rec. I)、「シラシラシラー」(Rec. II)ぐらいでよいのですが、こういう長い音符のトリルは「だんだん速く交替」というのがスタイルです。また、ラのトリルのさいの「シ」の音には、「01235」という替え指(少し高めめの音になります)を用います。ただし、トリルの中で最初の「シ」の音だけは正規指遣いで演奏できるとベストです。

この曲に限らず、少しテンポを落ち着けていきながら曲を終わる方法は、よく行われます。

—Rondeau— 難易度 B3 —

この曲は少し速くて長いので、初級者のかたは後回しにする方がよいでしょう。練習するさいは、ゆっくりなテンポのマイナスイオンも活用してください。

「ロンド」は、主要主題(ロンド主題)の部分の間に2つか3つぐらいの副主題の部分をはさむ形式の曲です。この曲の場合、ロンド主題は16小節目までで示され、リピート記号により繰り返されます。17小節目から48小節目までが第一の副主題部分、65小節目からが第二副主題部分とみられます。「ダ・カーポ・アル・フィーネ」の指定により、曲の最初に戻って、*Fine*のところ(16小節)で終わります。

さて、八分音符にトリル記号と小さな音符の「後打音」がついたものがたくさん出てきます。これは、理想的には、たとえばRec. Iの1小節目の「ファ」であれば、「ソファソファミア」と演奏できるとよいのですが、「ソファミファ」ぐらいで演奏してもかまいません。

Rec. Iの19小節目などにある「ソのトリル」は、「ラソラソラソー」ぐらいで演奏します。いろいろな指遣いがありますが、「2345→245」を繰り返す指遣いが最もよく用いられます。

55小節目のように、スラーがかかった八分音符に+記号がついているときは、トリルは「下の音から始めて1回(1回半というべきか)」でも十分でしょう。たとえば、この小節のRec. Iならば、ファのトリルを「ファソファー」ですませるといえることです。

— Sarabande — 難易度 B1 —

サラバンドは、ゆったりと奏される3拍子の舞曲です。初級のかたの場合は、プレリュードよりも前にこの曲から練習を始めてもよいでしょう。(ただしその場合、トリルの指遣いなどについてはこれより前に位置する曲の解説も参照してください。)

Rec. Iの1小節に出てくる前打音は、第1楽章に出てきたものと同じく、ふつうの八分音符と考えてよいでしょう。Rec. Iの17小節と21小節にある「シ♭のトリル」は、シ♭とドの交替で演奏しますが、正規指遣いでは指が3本も動いて大変ですから、ドの音に「012367」という替え指を使ってみてください。ただし、トリルの開始音になる最初のドだけは、正規指遣いにできると申し分ありません。

— Allemande — 難易度 B3 —

アルマンデは「ドイツふう」の意味で、4拍子系の舞曲です。Gai という指定は英語の Gaily にあたるフランス語で、「陽気に」という意味です。

前半と後半で、Rec. IとRec. IIの役割がすっかり入れ替わる趣向になっています。歯切れよく、調子よく演奏できるとよいですね。初級のかたは、「サラバンド」「メヌエット」「プレリュード」の次ぐらいに練習するとよいと思いますが、十六分音符のところだけはゆっくりと何度も何度も練習を重ねてください。

— Gigue — 難易度 B3 —

ジークは8分の6拍子または8分の12拍子の速い舞曲です。

3つでひとまとめ(一拍)になる八分音符のうち、最初の二つをスラーで結んであるのはジークによくある仕方で、これがジークのリズム感をつくり出します。

この曲の場合、Rec. Iの4小節にあるような八分音符のトリルは、「ロンド」のときと同じように「下の音から始めて1回半」でよいでしょう。つまり、Rec. Iの4小節の「ミのトリル」ならば「ミファミー」でよいということです。そのかわり、できるだけピリッと効かせるために、すばやく。コツは、指に余分な力を入れず、軽くピクッと指を動かす感じです。

第二ジークは「フラット3つ」という、ちょっと面倒な調(ハ短調)です。Rec. Iの4小節にある「ミ♭のトリル」は、ミ♭の指遣いで吹いて、すばやく一瞬だけ1指を開けてください。

第二ジークのRec. Iの15小節にある「レのトリル」は、「ミ♭ → レ → ミ → レ (→ ミ → レ)」と演奏してみてください。バロック時代には、トリルの「高い方の音(この場合ならミ♭)」を少し高めの音(つまり普通のミ)にするのが好まれたので、それを取り入れた奏法です。

第一ジーク(1ere Gigue)のあと、第二ジーク(2e Gigue)に入り、また第一ジークに戻ります。ただし戻ったときは「繰り返し」を省きます。

— Menuet — 難易度 B1 —

メヌエットは比較的速いテンポで演奏される3拍子の舞曲です。Rec. IをRec. IIが追いかけるような趣向になっています。

四分音符についているトリルは「すばやく2回」くらいで。たとえばRec. Iの1小節目の「レのトリル」ならば「ミレミレー」のように演奏してください。対して二分音符のトリルは3回か4回ぐらいが適当でしょう。

14小節の「八分音符前打音」は、ここでも「ふつうの八分音符」のようにみてください。

この曲も比較的やさしく、また短くて取り組みやすいので、初級のかたは、「サラバンド」とともに、プレリュードよりも先に練習してもよいでしょう。

作曲者と作品について

Jean Dniel Braun は、生没年もどのような人だったかもよくわかっていませんが、旋律楽器のためのデュエット、無伴奏ソロ曲、通奏低音つきソナタなど、いろいろな器楽曲を残しており、その中には、ややめずらしい低音楽器（ファゴットなど）のためのデュエットもあります。

本書に収録した曲集は、パリで1728年に出版されたもので、ミュゼット、ヴィエール、リコーダー、フルート、オーボエなどで演奏できる曲集と銘打たれています。

初級者でも演奏できるやさしい曲ばかりで構成され、しかもフランスバロックの香り高く、気品ある歌謡性とはなやかな装飾性を兼ね備えた、貴重な曲集です。バロック時代に、イタリアでは緩急の楽章を組み合わせた「ソナタ」が発達したのに対し、フランスではいろいろな宮廷舞曲をとり合わせた組曲が発達しました。この曲集も典型的なフランスふう組曲になっています。

CDの演奏者について

長谷川圭子さんは大阪府在住のアマチュア奏者で、「RJPサポーター」さんの一人です。夫である長谷川智彦さんとのデュオ「Duo Affettuoso」やアンサンブルMuZooなどで活動されています。

石田誠司はRJPディレクターで、本書の著者でもありますが、現実にリコーダーを持って音を出した場合にはアマチュア的な腕前しかありません。

このように、本書のCDで演奏しているのは専門家奏者ではないため、演奏があまり上手でないところがありますが、初級者・中級者のかたには参考になると思います。

曲の難易度表示について

曲集や組曲の中の1曲ごと・ソナタの楽章ごとに、A1～C3の難易度表示を行いました。これはRJP独自の基準による「指回り難易度」の表示です。

A1 A2 B1 B2 B3 C1 C2 C3 の8段階があります。

A1 や A2 は「初級」というより「初心者」のレベル。B1～B2が初級、B3が中級、C1～C3が上級レベルというのが一応の目安です。しかし、C1以上が表示された速くてやや難しい曲の場合、付属CDに練習用の遅いテンポの伴奏も極力収録してありますから、中級者でも十分に組み込んでいただけます。そして、良い曲は非常に遅く演奏してもやはり楽しさがあるものです。「あまり遅いテンポではつまらないのでは」などと心配なさらず、ぜひ挑戦してみてください。